

フィールドワーク型タスクにおける 効果的な情報収集・活用の仕方

— 内容の充実した口頭発表を実現するために —

工藤嘉名子・大津友美

【キーワード】 フィールドワーク型タスク、情報収集、情報活用、地域社会、
口頭発表指導

1. はじめに

近年、トムソン (2007) で提唱された「壁のない教室」という概念や「『街を教室にする』プロジェクト」(本田・石村・小森 2014) などに代表されるような、学習者と教室の外の社会とをつなぐことを目的とした日本語教育実践の試みが多数なされている。地域の人を教室に招いてのビジターセッション (井上・高尾・寺嶋・戸坂 2014) や地域社会でのインタビュー活動 (戸坂・井上・寺嶋・高尾 2016)、地域社会を対象とした課題発見・解決型プロジェクト (畠山 2015) などである。これらの実践の形態や手法は様々であるが、いずれも学習者と教室外の社会との積極的な関わりを重視した教育実践事例である。

筆者らが担当する中級クラスでも、日本社会・文化に関する生きた知識を獲得し、教室の外の世界や地域の人々と積極的に関わっていく力を養うことを目的に、フィールドワーク型のタスクを実践している。このタスクでは、学習者は、自分が紹介したい「地域の名所」について下調べをしたのち、実際に現地に出向いて観察やインタビュー等の情報収集を行い、その成果をまとめて口頭発表を行う。成果発表の中には、内容的に充実し、その場所の特徴や魅力が端的に伝わってくる印象的な発表もある一方で、学習者自身の実体験や実感が乏しく、場所の魅力が伝わってこない発表もしばしば見受けられる。前者と後者の違いはいったい何に起因しているのであろうか。筆者らは、これまでの実践を振り返り、フィールドワークにおける現地での情報収集の仕方と収集した情報の活用の仕方がその一因ではないかと考えた。そこで、本研究では、前者のような内容の充実した発表について、情報収集・活用という観点から事例分析を行い、フィールドワーク型

タスクにおいて、より良い成果発表を実現する上で有効と思われる現地での情報収集とその活用の仕方について考察する。

2. 教育実践の概要

2. 1 科目の概要

本研究は、東京外国語大学の「全学日本語プログラム¹」の「中級2総合日本語401」という中級後半レベルの日本語学習者を対象とした科目での実践に基づく。この科目では、週5コマ(1コマ90分)で、4技能および文法・漢字を総合的に扱っている²。履修者は、協定校からの交換留学生をはじめ、学部正規生や研究生、日本語・日本文化研修留学生など、様々なカテゴリーの留学生で、出身国・地域も10数カ国・地域と多岐にわたっている。

このクラスでは、①日本社会・文化に関する生きた知識の獲得、②自分自身の考えを伝え合う力の養成、③身近な他者と積極的に関わっていく力の養成を目指し、「就活」や「商店街」など、日本社会・文化に関する身近なテーマを題材とした内容重視の授業を行っている。また、授業で学んだテーマについての理解を深め、地域社会や地域の人々と積極的に関わっていけるよう、教室にゲストを招いてのインタビューや、地域社会でのフィールドワークといったタスク活動を行っている。使用教科書は『日本で学ぶ留学生のための中級日本語教科書 出会い』である。

2. 2 フィールドワーク型タスク「地域の名所を紹介する」の概要

この授業では、大学や自分が住んでいる場所の近隣地域に各自が出向いて観察やインタビューなどの情報収集をし、そこで得られた情報や体験をもとに口頭発表を行う、フィールドワーク型のタスクを2回実施している。1回目は「街で見つけたおもしろいもの」、2回目は「地域の名所」がテーマで、これらは、教科書の4つのタスクのうち、タスク1とタスク3にそれぞれ相当する。本研究では、2つ目の「地域の名所を紹介する」というタスクについて事例分析を行う。

このタスクは、教科書の第3課「地域と共に生きる」で「商店街」「老舗の豆腐屋

¹ 「全学日本語プログラム」は交換留学生や研究生、日本語・日本文化研修留学生など多様なカテゴリーの留学生を対象とした日本語プログラムで、「初級1(初級前半)」から「超級」までの8レベル編成で日本語教育を行っている。

² 1学期につき13週、計65コマとなっている。また、この科目は2クラス編成となっており、1クラスの履修者数は、通常15～20名である。

の事例」について、第4課「自然との共生」で「里山」「自然と共生する町の事例」について学習した後に実施している³。大学の近くや自分が住んでいる地域の名所を1つ選び、その場所の歴史や地域との関わりについて調べたことを発表するというタスクである。ここでの「地域の名所」は、観光ガイドブックに載っているような有名な場所である必要はなく、地元の人がよく行く公園や神社、商店街の店などでよい。ただし、このタスクでは、「その場所の歴史や地域との関わりについて知る」「その場所の特徴や魅力を聞き手に伝える」ということが目的であるため、目的に合った場所を選ぶ必要がある。

タスクは、教科書の「タスクの流れ (p.131)」にしたがい、9つのSTEPで段階的に進めていく。各STEPの活動と主な学習項目は図1の通りである。

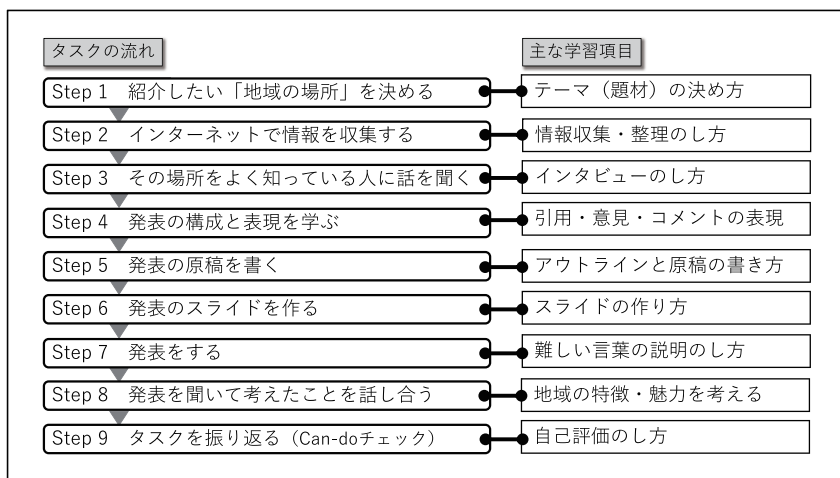


図1 タスク「地域の名所を紹介する」の流れと主な学習項目

まずSTEP1で自分が紹介したい場所を決め、STEP2でインターネットを使ってその場所に関する基本情報を収集し、教科書のワークシート (pp.131-132) に情報を整理する。ここでは、主に、紹介したい場所の正式名称・所在地・施設の概要・歴史・地域との関わりなどについての情報を集める。この作業は授業時間内

³ 第3課・第4課のテーマとタスクは、「地域の歴史とそこに暮らす人々の思い」という共通の切り口で結びついている (工藤 2015)。

に行い、教師は、学習者が選んだ場所がテーマとして相応しいかどうか、どのように情報を探せばよいかといった観点から適宜サポートをする。しかし、インターネットで検索しただけでは、日本語による歴史の説明が難解で理解できなかったり、地域との関わり（地域のためにどんなことをしているか、地域の人にとってどんな場所か）についての情報が探せなかったりする場合が多い。そこで、STEP3では、インターネットでは調べられなかったことをもとに、その場所について聞いてみたい質問を考え、現地でのインタビューの準備をする。そして、初対面の人に話を聞く際の表現を練習した上で、各自、週末などを利用して現地での情報収集を行う。情報収集が終わったら、STEP4～STEP6で発表の準備を進め、STEP7で口頭発表、STEP8で振り返りのディスカッション、STEP9で自己評価（Can-do チェック）を行う。ちなみに、このタスクには全体で5～6コマかけている。

3. 研究の目的および方法

3. 1 研究の目的

本研究では、上述のフィールドワーク型タスク「地域の名所を紹介する」の成果発表において、特に内容の充実した発表事例を分析対象とし、学習者がどのように現地での情報収集を行い、そこで得られた情報や経験をもとに発表の内容を組み立てていったのか、フィールドワーク型タスクにおける情報収集と活用の実際を明らかにする。そして、事例分析の結果に基づき、フィールドワーク型タスクにおいて、より充実した内容の発表を実現するために有効と思われる情報収集・活用の仕方について考察する。

3. 2 分析対象

本研究では、2018年度春学期の「中級2 総合日本語 401」の1つのクラスで行った「地域の名所を紹介する」の発表12件のうち、筆者2名が特に「内容が良かった」と判断し、かつ、下記の要件を満たした発表2件を事例分析の対象とする。「内容が良かった」と判断した基準は、①その場所の特徴・魅力をわかりやすく説明していた、②収集した情報に基づき自身の考えや感想を深めていた、という点である。また、分析対象を絞る際に考慮した要件は、①選んだ場所が発表者にとって身近な生活圏内にある、②このタスクで初めてその場所について知った、③現地で複数のリソースから多くの情報収集をしている、という3点である。

分析の対象とした事例2件の発表者を仮名で「タン」「リナ」と呼ぶ。2名の発表テーマおよび学習者情報は表1の通りである。「出身地域」は2名ともアジアであるが、国籍は異なる。また、表1の「滞日期間」は、タスクの発表を実施した2018年6月初頭現在である。この2名には、同意書により研究協力への承諾を得た上で、学期が終了した2018年7月に、タスクの振り返りを目的とした聞き取りを実施した。聞き取りでは、タスクの感想やタスクで活用した人的・物的リソースについて聞き取りを行ったほか、発表原稿を参照しながら、原稿に書かれている内容の情報源について学習者に確認した。

表1 分析対象の発表テーマおよび学習者情報

	発表テーマ	発表者(仮名)	性別	出身地域	滞日期間*
事例1	一橋大学	タン	男性	アジア	8カ月
事例2	府中市美術館	リナ	女性	アジア	2カ月

*「滞日期間」は2018年6月初頭現在

これら2つの事例について、本研究では、①成果発表の動画とその文字化資料、②発表の原稿と発表で使用したスライド資料、③学習者への聞き取りの音声とその文字化資料を分析対象データとする。

3.3 分析方法

主に次のような2つの観点から、成果物(発表原稿、スライド、発表での発話)および現地でのインタビューの内容について、2つの事例を分析する。

① 現地での情報収集(観察・インタビュー)で、どのような情報を得たのか。

また、そこからどのような印象や感想を持ったのか。

② 現地での情報収集の成果が発表にどのように生かされているか。

分析の観点①については、発表原稿および学習者への聞き取りの内容に基づき、「観察」「現地でのインタビュー」に分けて記述する。分析の観点②については、発表の構成(序論・本論・結論)に沿って、彼らが収集した情報がどのように発表の内容・記述に組み込まれているのか談話分析する。

4. 事例分析

4. 1 事例1(タン)

タンが発表のテーマに選んだ場所は、東京都国立市にある一橋大学である。タンによると、発表のテーマを決めるのは難しかったそうであるが、アルバイト先の近くにどこか面白い場所がないか、場所の評判がわかる母語のアプリで検索した結果、すぐそばに一橋大学があることを知り、テーマに選んだとのことである。一橋大学を初めて訪れた彼は、現地でどのような情報収集を行ったのであろうか。表2・表3は、彼への聞き取りをもとに、タンが一橋大学を訪れた際に観察したこと(何を見たのか)、インタビューしたこと(だれに何を聞いたのか)、そのときの印象や感想をそれぞれ整理したものである。なお、タンが現地に情報収集に行ったのは週末である。

表2 現地で観察したこと(事例1:タン)

観察したこと	印象・感想
一橋大学のレンガ造りの校舎 【写真撮影】	古いヨーロッパのような特別な建築だ。 さすがに長い歴史を持った大学だ。
キャンパスで写真を撮っている人	この大学は観光地のようなようだ。
キャンパスの木陰でお菓子などを食べている家族(複数)	この大学のキャンパスは公園のようなようだ。

表3 現地でのインタビューの内容(事例1:タン)

インタビュー相手	聞き取りの内容	印象・感想
キャンパスで写真を撮っていた年配の男性	初めて大学に来たので、大学のこと(歴史など)はよく知らない。	(キャンパスで写真を撮っている人がいて)この大学は観光地のようなようだ。
キャンパスで会った一橋大学の男子学生(4年生)	高校生もキャンパスに見学に来るが、近所の幼稚園の保育士もよく子どもたちをキャンパスで遊ばせている。	この大学のキャンパスは公園のようなようだ。
大学の前の大通りで会った会社員の女性(近くの会社勤め)	国立市は文教都市として知られている。一橋大学は優秀な人材を育成していて、この地域の教育のシンボルである。	一橋大学は地域の人々にとって自慢できる場所なのではないか。

まず、タンは、一橋大学のレンガ造りの校舎を見て、「古いヨーロッパのような特別な建築」で「さすがに長い歴史を持った大学だ」と思った。「さすがに」とあるのは、事前にインターネットで大学の歴史について調べてあったからだとのことである。タンはここで校舎の写真を撮っている。また、キャンパスで写真を撮っている年配の男性を見かけ、大学の歴史など何か知っているか質問したが、「初めて来たのでよく知らない」と言われる。しかし、キャンパスで写真を撮っているという事実から、「この大学は観光地のような印象を得る。さらに、キャンパスの木陰でお菓子などを食べながらくつろいでいる親子連れを複数見かけたことから、「この大学のキャンパスは公園のような印象を持った。

次に、キャンパスで出会った一橋大学の4年生の学生から、「キャンパスには高校生だけでなく、近所の幼稚園の子どもたちも遊びにくる」という話を聞き、ここでも「この大学のキャンパスは公園のような場所だ」と思ったという。ここまでの観察やインタビューから得た情報は、主に「一橋大学のキャンパスの印象」に関するものである。一方、大学の前の大通りで出会った会社員の女性と5分程度話をし、「国立市は文教都市として知られている」「一橋大学は優秀な人材を育成していて、この地域の教育のシンボルだ」といった、一橋大学の評判や地域の人にとってのイメージなどについての知識を得る。そして、この女性に聞いた話から「この大学は地域の人々にとって自慢できる場所なのではないか」という考察に至っている。

では、タンは現地での情報収集の成果を実際の発表の内容や記述にどのように生かしたのであろうか。このタスクの発表の構成は、「1.はじめに」「2.概要」「3.歴史」「4.地域との関わり」「5.おわりに」で、2～4が本論に相当する。発表の構成に沿って、タンが発表で用いた情報とその情報源を図示すると、図2のようになる。図中の下線部は、現地での情報収集に基づく情報である。

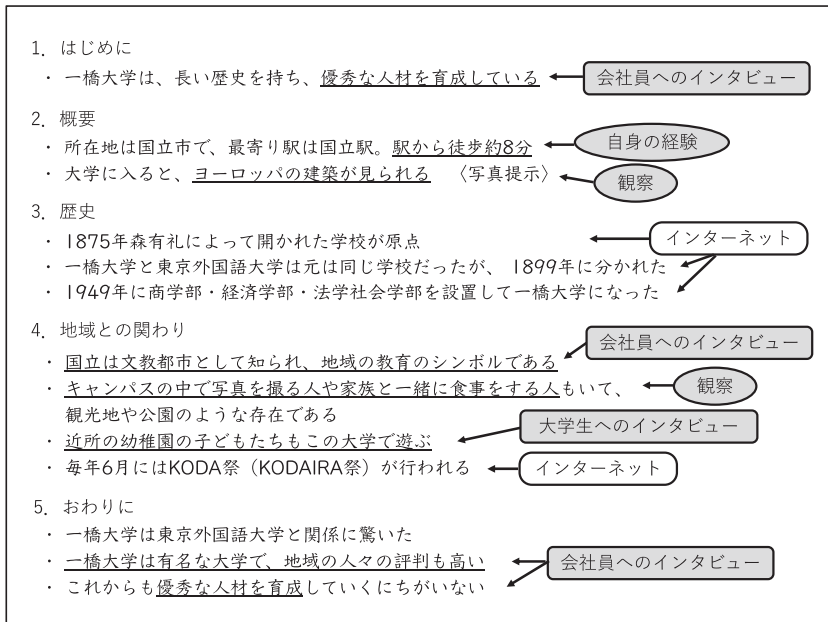


図2 事例1：タンが発表で用いた情報とその情報源

図2から、タンの発表は、一橋大学の歴史と「KODA祭(大学祭)」の説明にインターネット情報が用いられている以外は、基本的に現地で収集した情報に基づき、内容が組み立てられていることがわかる。特に、「2. 概要」は現地での経験と観察が、「4. 地域との関わり」はインタビューの内容がもとになっている。実際の発表では、それぞれ【発話①】、【発話②】のようになっている。

【発話①】は一橋大学の概要説明である。駅から大学までの所要時間について、タンは、実際に歩いてみた経験をもとに、「駅を出て、たぶん、あー、徒歩8分ぐらい」と説明している。また、大学の校舎の外観について、「一橋大学に入った途端に、この、あー、ヨーロッパ、ヨーロッパ建築を、見えます」と、自分が撮った写真を指さしながら説明しているが、「大学に入った途端に」という表現にタンの実体験が投影されており、臨場感が伝わる。また、本人が工夫したという「ヨーロッパ建築」という表現によって、レンガ造りの校舎のイメージを端的に伝えている。そして、「私の大学(東京外国語大学)のなんか現代的な建築ではなく」「さすがに長い、あー、歴史を持った大学ですね」と、校舎の外観から受けた印

象を「歴史の長さ」という観点から表現している。タンは、この発表で自分が伝えたかったことは「一橋大学の長い歴史と東京外国語大学との深い関係」「地域の人にとっての教育のシンボルであること」だと振り返っているが、現地での観察や実体験を自分自身が伝えたいことにうまく取り込んでいることがわかる。

【発話①：概要の説明】下線＝現地で収集した情報 波線＝感想・意見

あー、まず所在地ですが、この大学は、あー、東京都国立市にあります。国立は、あー、この大学の最寄り駅は国立駅です。駅を出て、たぶん、あー、徒歩8分ぐらい、えー、時間がかかります。この、これは一橋の大学の写真です。私は撮った、撮りました、これ2つの写真。〈スライドの写真を指さす〉これ、大学。あ、一橋大学に入った途端に、この、あー、ヨーロッパ、ヨーロッパ建築を、見えます。私の大学のなんか現代的な建築ではなく、ヨーロッパの建築、あー、たくさんあります。さすがに長い、あー、歴史を持った大学ですね。あー、おもしろい、きれいですよね。

【発話②】は一橋大学と地域との関わりについての説明の一部である。ここでは、「この大学の近くの人に聞いて」「～そうです」という引用標識を用いて、「国立が文教都市としてよく知られている」「一橋大学はこの地域の教育のシンボルだ」というインタビューで聞いた話を伝えている。「国立＝文教都市」という文脈を提示することで、「一橋大学＝地域の教育のシンボル」というイメージがより明確になっている。そして、「ですから、この大学のキャンパスの中で、……」と、インタビューで聞いたこの大学の良い評判を、自身がキャンパスで観察した「写真を撮る人」「家族で食事をする人」に結びつけ、なぜ多くの人がキャンパスを訪れるのかという理由を、「ですから」という一言で説明している。「あー、なんか観光地や公園みたいな存在です」という感想においても、「写真を撮る人」と「観光地」、「家族で食事をする人」と「公園」を対応づけることで、自身の観察と意見を端的に表現している。このように、インタビューで得た情報と観察したことに関係性を見出し、的確な表現を用いて言語化している点に、タンの思考過程と工夫がうかがえる。

【発話②：地域との関わりの説明】下線＝現地で収集した情報 波線＝感想・意見

この大学の近くの人々に聞いて、国立は、あの一、文教都市としてよく、あ一、知られるでは、あ一、だけでなく、この大学はこの地域の教育のシンボルだそうです。あ一、ですから、この大学のキャンパスの中で、たくさんの人はこのキャンパスに来て、写真を、あ一、撮る人もいれば、なんか家族と一緒にこの大学のキャンパスで食事をする人もいます。あ一、なんか観光地や公園みたいな存在です。

4. 2 事例2(リナ)

タン同様、リナも紹介する場所を選ぶのに苦労したという。自分の大学のある府中市にはなかなか「名所」が見つからず、自分が関心を持っている劇場についてインターネットで検索しているときに、偶然、府中の森市民劇場のサイトで府中市美術館のことを知り、この美術館に興味を持ったとのことである。場所選びで府中市にこだわった理由について、リナは、自分がこれから4年間住むことになる府中のことを少しずつでも学びたかったからだと言っている。

まず、リナは、美術館の外観や来場者があまりいない様子から、「小さいが、雰囲気はとても静かだ」という印象を受ける。また、緑が多い周囲の様子から「景色が爽やかだ」と思い、思わず写真撮影をしたという。こうした観察を通して、リナは、来場者の少ない小さな美術館に対して好感を持ったようである。

次に、美術館の受付で、インタビューの目的や美術館について知りたいことなどを伝えたところ、受付の人が美術館のスタッフを呼んでくれ、そのスタッフが館内を案内してくれたという。5分程度の案内だったとのことであるが、リナはスタッフから、美術館の歴史や来場者数、美術館の特徴など多くのことを説明してもらい、表5にあるような情報を収集している。中でも、常設展には地元、府中出身の作家の作品も多く展示されていることに、「府中の作家を大切にしている素晴らしい」と感動したとのことである。また、「公開制作」というオープンスタジオや地元のボランティアのためのワークショップの話聞いて、「このような美術館は特別だ」と思ったという。スタッフの説明は早口で、全部は聞き取れなかったが、リナはメモを取りながら話を聞いたそうである。こうしたインタビューによる情報収集の結果、府中市美術館と地域との関わりや他の美術館にはない特徴について、彼女なりの理解が持てたようである。なお、リナは、入場料が高かったこともあり、特別展を見ていない。しかし、特別展のポスターやチラ

シを見て、当時の企画展や入場料についても情報収集をしている。

表4 現地で観察したこと(事例2:リナ)

観察したこと	印象・感想
大きな美術館ではなく、人も少ない。 【写真撮影】	小さいが、雰囲気はとても静かだ。
府中の森公園の中にあるので、緑がたくさんある。【写真撮影】	景色が爽やかで、思わず写真を撮った。
「公開制作」(オープンスタジオ)を部屋の外から見たが、そのときは何もやっていなかった。【写真撮影】	そのとき何もやっていなくて、残念だった。
現在やっている特別展(長谷川利行「七色の東京」展)と入場料(700円)	素晴らしい絵だ。特別展は少し高い。

表5 現地でのインタビューの内容(事例2:リナ)

インタビュー相手	聞き取りの内容	印象・感想
美術館のスタッフ (女性)	2002年10月に開館した。	あまり歴史は長くない。
	上野の美術館などとは違って、普段は客が少ない。	客が少ないのは残念だ。
	常設展では、江戸時代から現代までの府中の作家の作品などを展示している。	府中の作家を大切にしている、素晴らしい。自国には地域を大切にする美術館はあまりない。
	「公開制作」(オープンスタジオ)は他の美術館にはない。スタジオの外から作家が作品を作っている様子を見ることができる。	このような美術館は特別だと思う。
地元のボランティアにワークショップをして、彼らに作品の説明をしてもらっている。		

以上が現地でリナが行った情報収集の内容である。これらの情報がどのように発表で活用されたのか、リナが発表で用いた情報とその情報源を図示すると、図3のようになる。リナの発表においても、タンと同様、主に「2.概要」と「4.地域

との関わり」の部分に現地での観察とインタビューで得た情報が活用されていることがわかる。これらに該当する発話が【発話③】【発話④】である。

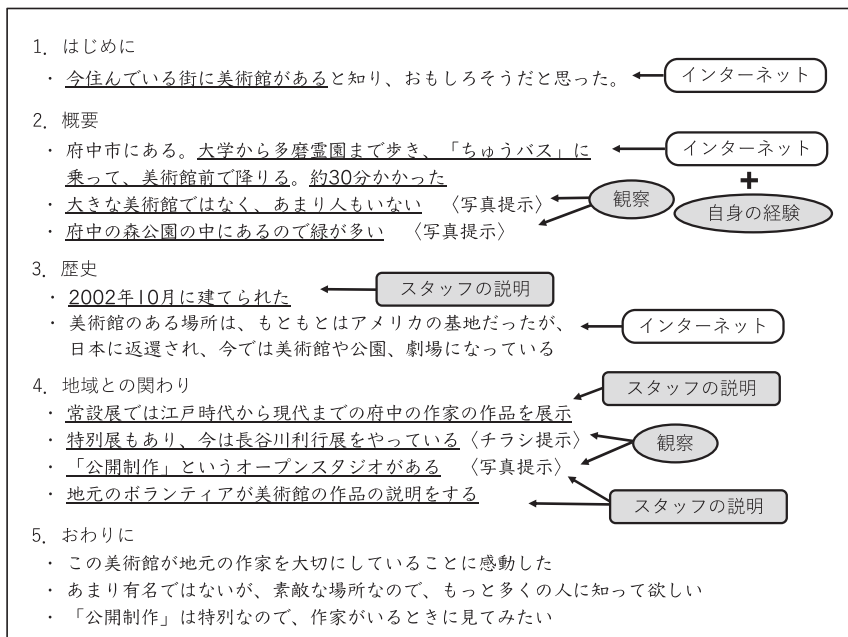


図3 事例2：リナが発表で用いた情報とその情報源

【発話③】は府中市美術館の概要説明である。リナは、府中市美術館の外観の写真をスライドで指し示しながら、「上野(の)美術館みたいな大きな美術館ではないですが、えっと、雰囲気がとても静かです」と、よく知られた大きな美術館と対比させることで、府中市美術館の小さくて静かな佇まいを伝えようとしている。そして、「府中の森公園という大きい公園の中にありますので、あの、緑がたくさんあります」と現地で観察したことを述べた後、美術館の前で撮った自分の写真を見せながら、「なんか爽やかだったので」思わず写真を撮ってしまったという実体験を語っている。「大きい公園の中」「緑がたくさん」という説明が「爽やかだった」という感想にうまく結びついている。また、自分の写真を撮ったもう一つの理由として、「人もあんまりいなかった」という当時の状況を伝えている。こうした現地での体験や印象を「写真を撮る」という行為と結びつけて語ること

で、緑に囲まれた地元の小さな美術館がリナにとっては素敵な場所に思えたことを効果的に伝えている。

【発話③：概要の説明】下線=現地で収集した情報 波線=感想・意見

えっと、これは府中美術館の写真です。〈スライドの写真を指さす〉なんか、上野美術館みたいな大きい美術館ではないですが、えっと、雰囲気がとても静かです。府中美術館は府中の森公園という大きい公園にありますので、あの、緑がたくさんあります。はい。(略)これは府中美術館の前です。〈スライドの写真を指さす〉あのー、とか、私がない写真を撮るのは忘れてしまいました(笑)。で、あのー、すいません。ちょっと恥ずかしいです。全然、東京の人気のスポットではないですが、なんか爽やかだったので、はい。人もあんまりいなかったし、自分の写真撮りました。

【発話④】は府中市美術館と地域との関わりについての説明の一部である。リナは、現地でスタッフから聞いた話をもとに、「公開制作」という名前の「オープンスタジオ」を「府中(市)美術館の特徴」の一つとして紹介している。部屋の外から撮ったガラス張りのオープンスタジオの写真をスライドで見せながら、自分が行ったときには「作家がいなかった」ので「残念」だったが、「このオープンスタジオというのは、他の美術館ではあんまりないそうです」と、スタッフから聞いた説明を引用して、府中市美術館独自のユニークな試みであることを伝えている。【発話③】同様、現地で撮った写真をうまく活用しながら美術館の特徴を効果的に説明していると言えよう。

【発話④：地域との関わり説明】下線=現地で収集した情報 波線=感想・意見

あのー、そして、府中美術館の特徴は、公開制作？というオープンスタジオがあります。〈スライドで写真を提示〉ここからは、作家が作っている作品を見ることが出来ます。私が行ったのは、作家がいなかったんです。残念ですよね。毎日ではないそうです。このオープンスタジオというのは、他の美術館ではあんまりないそうです。

5. 考察

ここでは、上述の分析で明らかになったタンとリナの情報収集・活用の実際に基づき、フィールドワーク型タスクにおいて内容の充実した発表を作り上げるために有効と思われる、情報収集と情報活用のし方について考察する。

まず、現地での情報収集について、タンとリナに共通していることの一つは、その場所の外観や周りの様子、そこに来ている人などをよく観察しているという点である。ガイドブックに載っているような珍しいものだけに目を向けるのではなく、「キャンパスで食事をする家族」や「人があまりいない美術館」など、自分が訪れたときの情景をよく観察しており、フィールドワークにおいて「見る」という行為の重要性を再認識させられる。もう一つは、インタビューによって複数の観点から情報を収集しているという点である。タンは大学の評判や地域の人との関わりについて、リナは美術館の歴史や来場者数、独自の取り組みなどについての情報をそれぞれ収集している。これは、彼らが事前に質問事項を複数の観点から準備していた成果であると言える。同じ質問を複数の人に聞くというインタビューの手法もあるが、このタスクの場合、異なる観点からの質問を準備しておくことが場所の特徴を多角的に説明する上で有効な情報収集につながると考えられる。

次に、情報活用において2人に共通しているのは、現地で収集した情報を取捨選択し、その場所の特徴や魅力として自分自身が伝えたいことの根拠に用いている点である。タンの場合、会社員へのインタビューで得た「文教都市、国立の教育のシンボルである」という一橋大学の良い評判と、キャンパスを訪れる人についての観察や学生へのインタビュー内容とを関連づけている。リナも、「緑に囲まれた静かな雰囲気的美術館」という特徴を説明するために、現地での観察や体験をうまく取り込んでいる。実際の観察やインタビューでは、2人とも、もっと多くの情報を収集しているが、自分が伝えたいことを説明するのに必要な情報を取捨選択して効果的に用いており、それが結果的にその場所の特徴や魅力をわかりやすく伝えることに寄与したと言えよう。

さらに、2人への聞き取りの結果、タンもリナも現地でのインタビューで自身が聞き取った情報について、発表原稿を書く際に、その内容が正しいかどうか確認していることがわかった。タンは、キャンパスでインタビューした一橋大学の学生と雑談をしているうちに仲良くなり、後日、SNSを通じて発表の内容について誤りがないかどうか確認してもらったとのことである。一方、リナは、スタッ

フが早口で聞き取れない言葉もあったため、府中市美術館のホームページで「公開制作」などについて確認したという。このように、現地での情報収集の内容や自身の理解について慎重に確認することにより、発表の際に、自信を持って正確な情報を伝えることができるはずである。

以上のことから、フィールドワーク型タスクでは、充実した内容の発表を実現する上で、次のような指導や働きかけが有効ではないかと思われる。

- ① 現地では注意深い観察を行い、写真やメモの形で記録する。
- ② 現地でのインタビューにおいて多角的な情報収集ができるよう、複数の観点から質問事項を準備しておく。
- ③ 自分自身が発表で伝えたいその場所の特徴・魅力が何かを明確にした上で、インターネット検索やフィールドワークで収集した情報の中からその根拠となる情報を取捨選択して、説明に用いる。
- ④ 現地で収集した情報について自身の理解が正しいかどうか自信がない場合には、ホームページなどで確認する。

6. まとめと今後の課題

本研究では、「地域の名所を紹介する」というフィールドワーク型タスクについて、現地での情報収集・活用という観点から事例分析を行い、より良い成果発表を実現する上で有効と思われる働きかけについて考察した。今後は、現情報収集・活用において問題のある事例についても分析し、フィールドワーク型タスクがうまく遂行できない学習者への働きかけについても考察したい。

参考文献

- (1) 井上佳子・高尾まり子・寺嶋弘道・戸坂弥寿美 (2014)「ビジターセッションに対する学習者の意識—より効果的なビジターセッションの運営に向けて—」『ポリグロシア』Vol.26, pp.105-120
- (2) 工藤嘉名子 (2015)「中級教科書『出会い』におけるタスクの設計」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』Vol.41, pp.201-215
- (3) 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2015)『日本で学ぶ留学生のための中級日本語教科書 出会い【本冊：テーマ学習・タスク活動編】』ひつじ書房
- (4) 戸坂弥寿美・寺嶋弘道・井上佳子・高尾まり子 (2016)「学外での日本語母語話者

へのインタビュー活動に関する一考察—学習者の不安とその変化を中心に—」『日本語教育』Vol.164, pp.79-93

- (5) トムソン木下千尋 (2007)「地域社会 (Communities) に広がる学習共同体—オーストラリアの大学の日本語教育の場合—」『日本語教育』Vol.133, pp.15-21
- (6) 畠山理恵 (2015)「地域社会を対象とするプロジェクトワークの試み—留学生は地域の課題をどう解釈し解決策の提案を行ったか—」『日本語教育方法研究会誌』Vol.22, No.2, pp.10-11
- (7) 本田明子・石村文恵・小森千佳江 (2014)「街を教室にするプロジェクト—社会参加をめざす日本語教育における教員の役割—」『2014年度実践研究フォーラム予稿集』, pp.23-26

How to Report Fieldwork:

Methods of Collecting and Utilizing Information for Effective Oral Presentations

KUDO Kanako, OTSU Tomomi

Key Words: fieldwork, how to collect information, how to utilize information, local communities, oral presentations

This paper explores a case study of two Japanese language learners who made effectual oral presentations of their fieldwork. The learners carried out a task which required them to select one place of interest near their residence, and inquire about its history, its significance to the local residents, and so on, and to report the results. Their presentations were consistent and rich in content. How could they collect abundant information and utilize it effectively for the presentation component? The purpose of this study is to find out how the learners gathered fruitful information and then utilized it constructively in their oral presentations, by exploring the discourse of their individual oral presentations and follow-up interviews. The analysis gives the following results:

- (1) They carried out detailed on-site observations, took notes, and took photographs.
- (2) They interviewed the local residents on the spot so that they could collect information from diversified standpoints.
- (3) They sorted through all the information and presented only that which matched their main points.
- (4) They double-checked their fieldwork results with official information before delivering their oral presentations.